

2011年3月11日、東北地方を襲った巨大地震、巨大津波は深刻な原発事故を引き起こした。あれから12年近くが過ぎ、色々なものが変わった。エネルギー情勢、原発をめぐる世論や政策、復興予算という言葉の響き。当時小学4年生だった私が大学4年生になってしまう12年という歳月、特にここ数年のコロナ禍やロシアによるウクライナ侵攻などの情勢の激変を受けて、大震災と原発事故の当時の衝撃は徐々に遠くなっていっているように感じる。しかし、今回のフィールドトリップで福島を訪れる機会をいただいた私を感じたのは、福島原発事故はまだ終わっていないということ、そして私にとっても決して他人事ではないということだった。

11時、富岡駅着。東京駅8時発の特急に3時間ほど乗って富岡駅に到着した私たちは、駅の改札付近で放射線量を示す電光掲示板を発見した（もちろん安全な水準だった）。早速、原発事故の影響を感じた。近くのホテルでお弁当を頂いてから、まず向かったのは、福島第一原子力発電所の周りを囲むように広がる中間貯蔵施設だった。

12時15分、中間貯蔵施設。中間貯蔵施設とは、福島県内の除染に伴い発生した除去土壌や廃棄物などを、最終処分までの間安全に保管している施設であり、最終処分の負担が少しでも軽くするために土壌等の体積を減らす処理を行っている施設でもある。施設の役割についての説明を受けた後、バスの中から私たちが目にしたのは、圧倒的な量の土壌だった。そこかしこに積み上げられ、最終処分場への移転を静かに待っている土壌の山からは、原発事故はまだ終わっていないという叫びが聞こえてくるようだった。受け入れ先について、帰宅困難区域への住民の帰還について、改めて考えさせられた。

14時、とみおかアーカイブミュージアム。時間の都合がつきそうということで、富岡町の資料館を見ることができた。津波に流されたパトカーや避難当時の様子を記した日記など、生々しい資料が展示されており、胸をつかれた。また、3.11以前の富岡町についての展示も充実しており、震災前には人々の生きる営みがあったという当たり前のことを思い出された。震災によって富岡町を知ったからか、富岡町への私の関心は震災以降に限られてしまっていたが、唐突に断ち切られる前の富岡町の姿を伝える展示を見てから、初めて震災や原発事故の悲惨さを正しく理解できたように感じた。

14時50分、東京電力廃炉資料館。通常3時間ほどの見学内容を1時間で見るということで、かなり駆け足ではあったが、廃炉の現状と今後についての知見を深めることができた。今後も続く廃炉作業の長い道のりや、処理水放出の説明など、課題は多い。一番大切なのは、起きてしまった原発事故から未来に向けて何を学ぶのかだと思う。

16時、語り部ツアー。最後に、富岡町出身の語り部の方の案内を受けながら、町をバスで巡った。私とほとんど歳が変わらない語り部の方が、避難生活を経た後で故郷の富岡町に戻

るという決断をし、語り部として故郷のかつての姿とその変貌とを伝えている姿を見て、復興の一つの姿を見たような気がした。ただ、街には学校や商店が少ないせいで、若者にはほとんど魅力がないのだと寂しげに話す語り部の方の様子は印象的だった。

17時40分、富岡駅発、東京へ。

今回のフィールドトリップは、1日とは思えないほど内容の濃く、充実したものだだった。大震災、そして原発事故について、もっと考え続けていきたいと思わされた。

それからもう一つ、今回のフィールドトリップでの私の収穫は、北京大学からの留学生たちとの交流だった。彼らの日本への理解の深さにはいつも驚かされるが、その源にはあったのは尽きない知的好奇心であることを今回感じる事ができた。

最後に、このような素晴らしい機会を作ってくださったすべての方々に感謝したい。本当にありがとうございました。